

漢字一日一字抄

— 漢字・漢語・漢文の窓〔七月・八月の部〕 —

堀 誠

キーワード：漢字、漢語、漢文、六書、故事成語、国語教育

【要旨】早稲田大学教育総合研究所二〇〇八～九年度公募研究「漢字・漢語・漢文に関する教育方法の検討」（主任：堀誠）の活動成果の一部として提出するものである。

研究部会活動においては、研究報告・発表のもう一方で、ある漢字一字を四〇〇字でレポートする「漢字一字雑抄」という取り組みを行った。それは自分自身の新たな漢字・漢語・漢文に関する意識を高め、自らの葉籠を創りだす試みにほかならない。四〇〇字という字数制約のもとで、自らの個性にしたがった内容を選択して構築するとの趣旨に沿って、自ら七月・八月の日録形式で漢字を選んで書きまとめたものである。

【報告】

漢字・漢語・漢文は、教育の現場でどのように工夫して教えられ、どのような成果を生み出し、かつ、その裏にはどのような失敗や困難がひそんでいるか。二〇〇八・九年度早稲田大学教育総合研究所公募研究「漢字・漢語・漢文に関する教育方法の検討」（主任：堀誠）は、かかる教育現場の現状を校種を超えてあるがまま

に認識し、その教育活動の実践体験を踏まえた成果の交流を通して、広域的な教学の将来を展望することを企図してスタートした。小学校・中学校・高等学校・大学の教員および大学院生・学部生によって構成された部会活動は都合十五回におよび、毎次、部会主任を含む二～三名がレポートを担当した。その一つところに知恵を出しあう時間的・空間的な営みは、幸いにも「早稲田教育叢書」の『漢字・漢語・漢文の教育と指導』（二〇一一年三月、学文社刊）として、第Ⅰ部「漢字・漢語・漢文と教育を考える」、第Ⅱ部「小学校・中学校・高等学校・大学の実践指導から」、第Ⅲ部「中国・韓国・欧州からのレポート」の構成のもとにまとめることができた。

思いかえせば、第二次世界大戦の敗戦から六十五年目の年回りとなった二〇一〇（平成二十二）年、時しも一九八一（昭和五十六）年の告示から二十九年ぶりに「常用漢字表」が改定された。戦前・戦後の漢字政策の歴史的展開、ならびに新『学習指導要領』の全面实施を控えた教学問題との関わりにおいて、その改定の意味を問いつけるべき転換点に際会する過程で、今日の漢字・漢語・漢文に関する教育現場の状況と教学の実践知を検証する機会を得たことは、将来を展望する上で大いに意味のある蓄積となったと考える。

研究部会活動では、研究報告・発表のもう一方で、ある漢字一

字を四〇〇字でレポートする「漢字一字雑抄」という取り組みをも推進した。それは各自が自分自身の漢字・漢語・漢文に関する意識を高め、自家葉籠を創出するための試みにほかならなかった。字数は少なくしぼるに如かず。四〇〇字という字数制約のもとで、個性にしたがってレポートを構築するところがポイントとなる。

この試みは、レポートする本人が万事に最も勉強になる。漢語・漢語・漢文をめぐる学びの庭の創生にほかならず、そこに潜在する「ことば」の源泉に遊び、親しみ、「読む」「書く」「話す」「聞く」という言語行為に不可欠と思われる根源的な力を発見して、その力を育む実践的な方法の考案、その教材と指導法の提案にも架橋し得るものであろう。すなわち、漢字のもつ歴史、漢語・熟語・故事成語の成り立ちとその意味世界、そして訓読による漢語・漢文の理解方法など、さまざまな視点から現実を見つめ直し、漢字・漢語・漢文の世界を多角的に掘りおこす営みは伝統や文化に触れ「ことばの力」の源泉を探究することにも連なろう。

本「漢字一日一字抄」は、時候や習俗等々に着眼して選んだ字にまつわる篇章を日録形式でまとめたものである。それは研究部会（註）の精神を引きつぐものであり、このささやかな篇々が、あらためて漢字・漢語・漢文の多様な世界に接近し、それらを多視的に科学する契機となることを期待してやまない。かつ教育の現場と教員養成の場に還元し得る材料の含有されることを念願する。

○七月一日

常用漢字

旧字体

簡体字

呉音 ケイ(クエイ)

螢 螢 螢

漢音 ギョウ(ギヤウ)
訓 ほたる

旧字体の「螢」は、「虫」と音符「𤇀ケイ」から成り、光を放ちながら飛びまわる虫、ほたるの意をあらわす。「𤇀」は、火でまるとりまく、光を放つ意。ほたるは、ホタル科の昆虫で、水辺に住み、腹部にある発光器から青白い光を放つ。「螢火」は、ほたるの光。『礼記』「月令」「季夏之月」(陰曆六月)に、「腐草 螢と為る」とあり、ほたるは腐った草から生まれると伝えられた。

苦心して学問すること、またその成果を「螢雪の功」という。晋の車胤は貧しくて常には油が買えず、夏には数十匹の螢を練囊うすあひのふくろに入れ、その光で書物を読み、後に官は尚書郎に至った。一方、晋の孫康は家が貧しく油も無く、雪明かりで読書し、後に御史大夫に至った。この二人にあやかって苦学することを「螢雪」、「螢窗けいそう雪案せつあん」の語で示した。「窗」は窓、「案」は机。

平安時代の和泉式部は、「ものおもへば沢の螢もわが身よりあくがれいづるたまかとぞ見る」と詠じ、飛びかう螢を自分の身から抜けでた魂かと見ているが、中国に先例はない。

○七月二日

常用漢字

呉音 ブ

腐

漢音 フ
訓 くさる・くされる・くさらす

「腐」は「肉」と音符「府」とから成り、肉がくずれて原形をとどめないこと、べったりくずれた肉をあらわす。くさる、くちる意。

「府」は、ものをびつしりと詰めこみ、しまっておくく。

また、「陳腐」の「陳」は、古い、古くて役に立たない意。「腐心」は、心を痛める、心を悩ますこと。日本語では、苦心する意。「腐木」以て柱と為すべからず(くさった木は柱にはできない意)は、「漢書」劉輔伝の「里語」に見えることば。卑しく劣った人物は主要なポストにすえられないことにたとえる。

「腐腸」は、腸をくさらせる意。後漢の王充の『論衡』言毒篇に「美味 腸を腐らす」とある。転じて、美味なもの。うまい食物や酒を「腐腸の葉」ともいう。「腐腸の賊」は、酒の異名。

「腐鼠」は、くさったねずみ。転じて、軽薄で卑しいもの。

○七月三日

常用漢字 古字

光 芟

呉音 コウ (クワウ)

漢音 コウ (クワウ)

訓 ひかる・ひかり

「光」という字は、人が頭の上に火を載せた姿を示し、ひかる、ひかりの意をあらわす。「光明正大」は、心が潔白で正しく大きいこと。「光明」は仏教読みで、仏の徳の光、後光の意。日本語では、希望も意味する。「光明藏」は、心の異名。

「光風霽月」は、雨後に吹くさわやかな風と澄みきった月。『宋史』周敦頤伝には、宋学の開祖と称される彼を「人品甚だ高く、胸懐洒落(しゃらく) (さっぱりしている) なること、光風霽月の如し」と記す。

「光陰」は、年月、時間の意。「光」が日・昼、「陰」が月・夜。唐

の李白の「春夜 桃李園に宴するの序」に、「天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の过客なり」と詠じるのを踏まえて、芭蕉は『奥の細道』に、「月日は百代の过客にして行きかふ年も又旅人なり」と記す。「逆旅」は、旅人を逆える宿屋の意。

「光陰惜しむべし」は、北斉の顔之推『顔氏家訓』勉学篇にある、時間の浪費を戒めた語。宋の朱熹の「偶成」詩にも、「一寸の光陰軽んずべからず」と詠う。「光陰 矢の如し」は月日の経つことの早いことをたとえる。

○七月四日

常用漢字 異体字

泉 淦

呉音 セン

漢音 ゼン

訓 いずみ

「泉」は、岩の間から水のしたたりわくさまを描いた象形文字で、いずみの意をあらわす。『説文解字』には、「泉は、水原なり。水の流出して川の形を成すに象」と説く。『孟子』離婁下という「原泉 混混として、昼夜を舍かず」の「原泉」は、「源泉」に同じく、混混とたえず湧きでる水のみなものと意。

「潺湲の彼の泉水、亦た淇に流る」(湧きでて早い流れとなる泉水の川は、淇水に流れこむ)と唱う『詩経』邶風「泉水」は、泉水の流れをみて、他国に嫁いでいる衛国の女が、国に帰りたくても帰れない望郷の念を詠じたもの。

泉のように広く行きわたって生活を潤すことから、ぜにの意味ももつ。古代には貝を貨幣としたので「泉貝」と呼ばれる。「泉貨」「泉幣」「泉布」も貨幣をあらわす。

○七月五日

常用漢字

源

呉音 ゴン

漢音 ゲン(グエン)

訓 みなもと

「源」は、「水」と音符「原」とから成る。「原」は、がけをあらわす「厂」と水の流れでるいずみの「泉」との会意文字で、水源を意味したが、「はら」の意に用いられるようになったので、「水」を加えた「源」が「みなもと」の意をあらわした。

『孟子』万章上にいう「源源として来たる」の「源源」は、水が源からたえず流れでるさまをいう。万物が絶えることなく続くこと、たえず来ることをあらわす。

漢方の薬餌でいう「医食同源」は、病気を治療する「医」も日常普段にとる「食」も、生命を養生するためのもので、「源を同じくする」との考え方に基づく。

「同源異脈」は、「源を同じくして派を異にす」と訓み、もとは源を同一にして流派を別にする意。『荀子』君道篇にいう「源清ければ則ち流れ清し」は、根本(君)が正しければ末流(民)も正しくなるたとえ。逆に、「源濁れば則ち流れ濁る」。

○七月六日

常用漢字

庭

呉音 ジョウ(チャウ)

漢音 テイ

訓 にわ

「庭」は、「广」と「廷」とから成り、屋敷のなかの平らに広くの

びた所、宮殿内の式場、中庭の意をあらわす。「廷」は、「庭」の原字で、平に広くのびたにわ。また、階段の前に人が立つさまにより、天子が引見するにわの意をあらわしたという。

「庭訓」は、「過庭の訓」の意。孔子が庭を通りかかった息子の鯉(字は伯魚)を呼びとめて、学ぶべきことを教えたのにちなむ語。

『論語』季氏篇に、あるとき孔子がひとり庭に立っている時、趨りして庭を通りすぎる鯉に、「詩を学んだか」と問うた。鯉が「いいえ」と答えると、「詩を学ばなければ、立派にものが言えない」と教えられて、詩を学んだ。また、別の日にも「礼を学んだか」と問うので「いいえ」と答えると、「礼を学ばなければ立っていけない」と教えられて、礼を学んだ、と鯉が陳亢に話したことを伝える。「趨庭」ともいう。

孔子が家庭教育では「其の子を遠ざくる」態度で特別扱いをしなかつたことがうかがえる。

○七月七日

常用漢字

呉音 シチ

漢音 シツ

訓 なな・ななつ・なの

七

横線をタテ線で切る、切断するさまを示した指事文字。もと、断ち切る意味をあらわし、「切」の原字である。

「七」は数詞として用いられ、数量をあらわす基数詞として「ななつ」、順序をあらわす序数詞として「なな」と訓で読む。中国の公文書や領収書では、字画の改竄を懼れて、「柒」を用いる。

また、「七」は文章の一体で、漢の枚乗に「七発」、魏の曹植に「七

啓」といった作がある。

曹植は魏の曹操の第三子で、兄の文帝（曹丕）にその才能をねたまれ、七歩あるく間に詩を作れと命ぜられた。

豆を煮て持ちて羹を作る、菽を漉して以て汁と為す。

其、釜下に在りて然え、豆は釜中に在りて泣く。

本、同根自り生ずるに、相煎ること何ぞ太だ急なる。

豆（曹植）と其（曹丕）を借りて、兄の無情を訴えたこの詩作を、「七歩の詩」と呼んで曹植の才をたたえている。

○七月八日

常用漢字

呉音 ジャク

漢音 セキ

訓 ゆう

夕

三日月の形を描いた象形文字。月が出るよる、月のがやくよるの意味をあらわしたが、のちに、ゆうがたの意となり、夜の意には別に「夜」の字が生まれた。なお、「月」の字も、三日月を描いた象形文字である。

「朝夕」は、音で読むと「チヨウセキ」、訓で読むと「あさゆう」。古く『春秋左氏伝』などに、「朝、夕に及ばず」「朝に夕を謀らず」「朝に夕を慮らず」の語句がある。事がさし迫って、朝の状態が夕方までではもたない、朝には夕刻のことを考えられない、生命がどうなるかわからないことを意味する。

『論語』里仁篇には、「子曰く、『朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり』と」とある。孔子が道（教え）を聞くことの重要性を、「朝に道を聞く」と「夕に死す」という「朝」「夕」を対比的に用いた

字句で説いた一流の表現である。

○七月九日

鵲

簡体字 慣用音 ジャク

呉音 サク

鵲

漢音 シヤク

訓 かささぎ

カササギは、スズメ目カラス科の鳥で、別名をカチガラス、チヨウセンガラスという。カラスに似ているが、肩から腹、腰に書けて白い。この鵲の噪ぐのは、よい事が起こる前兆だと信じられている。「喜鵲」と呼ばれ、「靈鵲 喜を報ず」とも称される。

日本のカササギは、豊臣秀吉の朝鮮出兵に際して、佐賀藩主の鍋島直茂が朝鮮半島から持ちかえって、繁殖したものである。佐賀・筑紫平野を中心に生息し、国の天然記念物、佐賀県の県鳥に指定される。「カチガラス」の呼称は、「かちかち（勝ち勝ち）」という鳴き声が縁起よいとされ、その声に因んだものという。

「鵲橋」は、七夕の夜、牽牛と織女を会わせるため、カササギが天の川にかけるといふ橋である。『小倉百人一首』に収める大伴家持の和歌に「鵲の渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」とうたわれたのは、中国の文献に見える習俗に支えられたものである。

○七月十日

蛭

呉音 チ

漢音 チ

訓 くも

クモは、節足動物門のクモ目に属するクモ類の総称。「蜘蛛」は「虫」と音符「知」とから成る。「虫」と音符「朱」とから成る「蛛」もクモの意をあらわし、「蜘蛛」と熟語化しても使われる。

クモは人間の居住空間に頻繁に出没する小動物で、その神出鬼没な行動に驚かされることも少なくない。前漢の雑事を集録している『西京雜記』卷三に、「蜘蛛集つて而して百事喜ぶ。」というクモの出現にまつわる吉慶の習俗が書きとめられる。わが国でも、古く『日本書紀』卷十三の衣通郎姫の歌に、

わがせこがくべきよひなり

さががにのくものおこなひこよひしるしも

と詠まれ、「蜘蛛の行い」に人の来訪を予知する俗信の行われたことが知られる。陰暦七月七日の七夕には、女子が針仕事、手芸の上達を祈る「乞巧」の行事がある。(七月十一日を参照)

○七月十一日

常用漢字

呉音 キョウ(ケウ)

漢音 コウ(カウ)

巧

訓 たくみ

「巧」は、「工」と音符「巧」とから成る会意兼形声文字で、細かく曲がりくねった細工をすることをいう。「たくみ」と訓じて、細工や伎芸が上手であること、その技や腕前をあらわし、また、たくみに上部をかざる、いつわる意味をもつ。

「乞巧」は、陰暦七月七日の七夕の祭り、女子が牽牛・織女の二星をまつり、針仕事、手芸の上達を祈ることをいう。その「巧み成らんことを乞う」祭りを「乞巧奠」と呼ぶ。箱の中にクモを

入れて、翌朝、その糸の張り具合によって技芸の巧拙を占った。

『論語』学而篇にみえる「巧言令色、鮮なし仁」は、口先のたぐみな「巧言」と人当たりよくへつらう「令色」とを、「仁」(まごころ)にもとる行為と孔子が戒めたことば。

『老子』第十九章には、「巧を絶ち利を棄つれば、盗賊有ること無し」とある。その「絶巧」は、技巧を弄することをやめること。「棄利」は、利益を求めぬ心棄てること。

○七月十二日

人名用漢字

旧字体

簡体字

呉音

レン

蓮

蓮

莲

漢音

レン

訓 はす

「蓮」は、「艸」と音符「連」とから成る会意兼形声文字。ハスは、ハス科の多年生水生植物。その花は「蓮花」「蓮華」と呼称される。日本では、蜂の巣状の花托に種子(果実)がみのである、ハチスがハスに転じたという。マメ科のレンゲは、ハスと花の形状が似ているので名づけられたという。

宋の周敦頤(一〇一七〜一〇七三)は「愛蓮の説」の中で、「予独り愛す」として、まず「蓮の淤泥より出でて染まらず」を挙げ、その廉潔さをよしとする。

ハスの花や実を採るさまを詠じた「採蓮曲」は、六朝梁の武帝にはじまり、楽府題の詩として書きつがれ、唐の李白は次のように詠む。

若耶溪の旁ら 採蓮の女

笑って荷花を隔てて人と共に語る

「採蓮」の「蓮」は「憐」「恋」に音が通じる。「荷花」はハスの花。夏の陽射しと澄んだ水を背景にして働く乙女たちは美しい。

○七月十三日

常用漢字 旧字体

呉音 ガ

荷 荷

漢音 カ

訓 に

「荷」は、「艸」と音符「何」とから成る会意兼形声文字。「何」は、人が肩に荷物をかつぐさまを描いた象形文字で、「になう」の意をあらわした。しかし、借りて疑問詞の「なに」の意に使われたため、「荷」が「になう」意に用いられた。

「荷」は地下茎から茎がのびて大きな葉や花がつく水草、ハス。「荷葉」はハスの葉、「荷花」「荷華」はハスの花。「荷月」はハスが花を開く陰暦六月の異名。『詩経』鄭風の「山有扶蘇」に、

山に扶蘇（小木）有り、
隰に荷華有り。

と詠まれる。『説文解字』には、「荷」は葉のこと、「蓮」は実のことともいう。

晋の陶淵明の「園田の居に帰る」五首のその三には、
晨に興きて荒穢を理え、

月を帯びて鋤を荷いて帰る。

と、早朝から荒れ地を整え、月とともに鋤をになって帰宅する陶淵明の生活ぶりがうたわれている。

○七月十四日

人名用漢字

呉音 ヘ

巴

漢音 ハ

「巴」は象形文字で、へびがとぐろを巻いているさまを描いて「へび」、引いては「うずまき」をあらわす。『説文解字』には、「象を食らう蛇」ともいう。中国古代の地理書として名高い『山海経』海内南経には、「巴蛇 象を食らい、三歳にして其の骨を出す。君子之を服さば、心腹の疾無し。」という。三年かかって消化され排出された骨が、君子の心臓や腹の疾病の妙薬となるとは摩訶不思議である。象を飲みこむほどの蛇は、『楚辞』天問にも次のように詠まれる。

一蛇 象を呑む、厥の大いなること何如？

フランスの首都パリは、巴黎、巴里と音写される。今日はバリ祭。巴勒斯坦は、パレスチナ。日本語の「ともえ」は、射手の肘につけた「鞆」に描いた絵をいい、また、うずまき形の模様をもういう。「巴投げ」は、自分の体を仰向けに倒して、相手の体を片足で支えながら投げる柔道の捨て身技。

○七月十五日

人名用漢字 本字・異体字

呉音 ライ

黎 劼

漢音 レイ

「禾」（イネ）と「水」との会意文字「黍」（キビ）に、音符「勹」（ス

キ)の省略形を合わせた会意兼形声文字。

「黎黒」の「黎」は、鉄製の農具のように浅黒い色、くろがね色をあらわす。「顔色黎黒」は、顔色が黒いことをいう。「黎明」は、うすぐらい夜明けがた。「黎」は、ころおいの意。暗さと明るさがまじりあつた早朝の時間帯をいう。

「黎民」は、もろもろの民の意。「黎」は、おおいさま、もろもろ。一説に、「黎」は「黒」の意味で、冠をつけず黒い髪をあらわにしている庶民、日焼けしてあざぐらい顔色をした民草とも解釈される。「黎首」「黎元」も同義。「首」も「元」も頭の意。

『孟子』梁恵王上には、「生を養い死を喪りて憾み無からしむる」を「王道の始め」といい、「七十の者 帛を衣て肉を食い、黎民飢えず寒えず。」という状態こそが王たる者の政であると説いている。

○七月十六日

常用漢字

呉音 ミン

漢音 ビン

訓 たみ

民

「民」は象形文字で、とつてのある錐の形にかたどる。また、目を針で突いたさまを描き、目を見えなくした奴隷をあらわすという。「たみ」は、統治される人々、官位のない庶人、広く人々を指す。

「民は国の本なり」とは、『淮南子』主術訓にある語。『史記』酈食其伝には「王者は民人を以て天と為す」という。人民は国の根本であり、『韓非子』五蠹篇には「民を視ること父母の如し」と、人君は父母が子に對するように人民を愛すべきことを説く。

『書経』蔡仲之命にいう「民心 常無し」は、政治の得失によつて人民の心は善にも悪にもなることを説いたもの。

『孟子』滕文公上には、「民事 緩むべからざるなり」という。「民事」は、民の仕事の意で、農業を指す。また、人民に關することから、転じて政治のこと。「民時」は、民が農業にいそしむべき時、農繁期をいう。

○七月十七日

常用漢字

呉音 ス

漢音 シユ

訓 ぬし・おも

主

「主」は、神壇の燭台の上で、灯火がジツと燃えるさまを描いた象形文字。「丶」は、燃える火。その神火を守るものの意から、「ぬし」「あるじ」の意にもつぱら用いられた。そのため、「火」と「主」から成る「炷」が原義をあらわした。

「主客」は、主人と客人、主体と客体。「主」と「客」とは反意語。『呂氏春秋』慎小にいうところの、「主 一言を過てば、国残われ名辱めらる。」は、主君たる者の一言が、国の存亡、名声の汚辱につながる一大事であることを説いたもの。

「民主」は、人民のかしらの意で、君主のこと。今日いう「民主国家」の「民主」は、国家の主権が人民に属することをいい、意味的に異なる。

○七月十八日

常用漢字

客

呉音 キヤク

漢音 カク

「客」は、「宀」(やね、いえ)と音符「各」とから成る会意兼形声文字で、よその家にやってくることに、また、その人。客人を意味する「まろうど」をはじめ、「たびびと」「商売の相手」といった意味をもつ。「旅客」は、今日では列車・航空機・船舶などの交通機関を使う人の意味であるが、もとは、たびびとの意。

「食客」は、中国の戦国時代、特殊な才能・技術によって、客分として召しかかえられた人。戦国時代の四君の一人に数えられる斉の孟嘗君は、食客数千人をやしなつたことで知られる。秦の宰相となつて暗殺されそうになつたとき、狗のように盗みの上手なものが狐白裘を盗みだし、これを秦王の寵姫に贈つて囲みを逃れ、夜明け前の函谷関では、物まねにすぐれた者が鶏の鳴き声をまねると、鶏が鳴きはじめて関所の門が開き、難関を脱出することができた。いわゆる「鶏鳴狗盗」の故事として著名である。

○七月十九日

常用漢字

船

俗字

船

簡体字

船

呉音 セン

漢音 セン

訓 ふね・ふな

中国最古の字書、後漢の許慎の『説文解字』には、「船は、舟なり」という。「舟」は、「木を刳つて舟を為り、木を刳つて楫を為り、以て通ぜざるを濟す」と解説する。「船」は、「舟」と音符「舩」と

から成る会意兼形声文字。漢の揚雄の著した『方言』には、函谷関を境に東では「舟」、西では「船」といったと記す。今日では小型のものを「舟」、大型のものを「船」と使い分ける。

「南船北馬」は、広大な大地をもつ中国の交通手段のちがいを端的にいったもの。南方は川・クリークが多いので船を用い、北方は山野が多いので馬に乗つて移動する。また、東奔西走の意もある。

「客枕」は、旅寝の枕、その枕もと。「客船」は、旅の船、旅客を乗せた船。唐の張継の「楓橋夜泊」に、次の句作がある。

姑蘇城外 寒山寺

夜半の鐘声 客船に到る

姑蘇は、江蘇省蘇州の古名。寒山寺は、唐代の詩僧で名高い寒山・拾得の止住した寺でもある。寒山寺の夜半を告げる鐘の音が、旅寝の詩情をいや増しに増す絶唱といえる。

○七月二十日

本字 常用漢字

簡体字

呉音 カイ

海 海 海

漢音 カイ

訓 うみ

「海」は、「氵」(水)と音符「每」とから成る形声文字。「每」は「晦」で、くらい意。くらく黒い水を深々とたたえた「うみ」をいう。『説文解字』段注に「凡そ地大にして物博き者、皆之を海と謂うを得」とあり、「海」は大きく広いことをいう。また「海水斗量すべからず」は、極めて大きいことをいった語。

「海外」が四海の外、国の外をいうのに対して、「海内」は海の内、国の内、天下を意味する。漢の高祖は、「威 海内に加わりて故郷

に帰る」と、故郷に錦をかざる思いを詠じている。

「海老」は、「海老い水乾く」ともいうように、海水の衰え減ずること。わが国では「えび」にあてる。「海豚」はいるか、「海豹」はアザラシ、「海驢」はあしか、「海象」はセイウチ。いわゆる蜃気楼を「海市」、あるいは「海市蜃気」「海市蜃楼」という。晋の伏琛の『三齊略記』に、「海上の蜃気、時に楼台を結び、海市と名づく」と見える。

○七月二十一日

俗字・異体字 簡体字

闊 潤 涸

漢音 カツ (クワツ)

「活」は水が勢いよく流れること、よどむことなく生き生きしていること。「門」と「活」から成る「闊」は、門の内が広いことから、「ひろい」意。人の度量の大きさ、気持ちのおおらかなことという。闊達・快闊がその意であり、迂闊の「闊」は間が抜けていること、久闊の「闊」は久しく疎遠であることをいう。

南朝宋の劉義慶の『世説新語』捷悟篇に、次の話がある。―楊脩が魏の武帝(曹操)の主簿であったとき、相国(宰相)府の門を造ろうとしていた。たるきを構えたところで曹操がご覧になると、下役の者に門に「活」の字を書かせて退いた。楊脩はそれを見ると取り壊させ、作業が終わると説明していった、「門の中に『活』があるのは、『闊』の字にはかなりません。魏王閣下は門が大きすぎるのをお嫌いになったのです」。

漢字は偏・旁・冠・脚などに分解できる。「門」と「活」という

パーツをあわせると一つの文字となるという字謎である。

○七月二十二日

常用漢字 旧字体 簡体字 呉音 カン (クワン)

寬 寬 寬

漢音 カン (クワン)

「宀」(家)と、体のまるいヤギを描いた象形文字「寬」とから成る会意兼形声文字。中がまるくゆとりのある家から転じて、スペースが広いこと、気持ちにゆとりのあること、大まかでのんびりしたさまをいい、動詞として、くつろぎ、ゆとりをもつこと、大目にて責めないこと、ゆるくすることを意味する。

『春秋左氏伝』昭公二十二年に「仲尼(孔子の字)曰く」として、「善き哉、政寛くすれば則ち民慢る。慢れば則ち之を糾すに猛を以てす。猛なれば則ち民残う。残えば則ち之を施すに寛を以てす。寛以て猛を濟い、猛以て寛を濟い、政是に以て和なり」という。「寛」と「猛」による政治的コントロールの大切さを説いている。

「寛政」はゆるやかで情けある政治の意。出典は『春秋左氏伝』莊公二十二年。江戸の第十一代將軍家斉の年号。松平定信が幕政の立て直しのために行つた「寛政の改革」でとりわけ知られる。

○七月二十三日

常用漢字 呉音 ガ

河

漢音 カ 訓 かわ

「河」は、「氵」(水)と「可」とから成り、直角に屈曲したかわ

をいう。黄河は、中国西北部の高原に源を発して、直角に屈曲して激流となる。その水は黄土を大量に含み「黄河」と呼ばれ、流れてが屈曲して大量の土砂を堆積し、時として氾濫をくり返した。

「河清」は、黄河の水が澄むこと。黄河の水はいつも濁っているが、千年に一度澄むと伝えられる。時間的に人の寿命から及びもつかないものであるから、「河清 俟ち難し」ともいう。

『西遊記』の形成過程にあつて、古く南宋のころの資料となる『大唐三蔵取経詩話』第三で、猴行者（孫悟空の前身）は、七たび黄河が清むのを目撃したと自らを紹介している。

「河源」は、黄河の発源地をいう。その流れは地下に伏流するので、発源地を見極めるのはなかなか難しい。

「河漢」は、黄河と漢水、天の川をいう。「河豚」はフグ、「河馬」はカバ。

○七月二十四日

常用漢字 旧字体

童 童

慣用音 ドウ
呉音 ズウ（ゾウ）
漢音 トウ
訓 わらべ

金文は、「辛+目+東+土」から成る。もと、「辛」（鋭い刃物、入れ墨の針）で目を突きぬかれ、あるいは入れ墨されて奴隷となつた者の意。「東+土」は「重」と同じで、土を突きぬくように重みがかかること。「里」はその変形。男のしもべ、召使い。

「児童」「童心」の「童」は、わらべ、わらわ、こどもの意。古くは、十五歳以下で、いまだ成人する前の者をいった。まだ物事をは

きり判断できないところから、無知やおろか、くらい意味もあらず。「童蒙」は、こども、また無知蒙昧をいう。「童蒙 我に求む」は「易」の「蒙」にいう語で、幼稚蒙昧の者がわたしに教えを求めめることを意味する。

「童」はまた、角のまだ生えていない牛・羊。山に草木がない、頭に髪がないことをもいう。「河童」と書いて、カッパに当てる。

○七月二十五日

人名用漢字 旧字体

蒙 蒙

呉音 モウ
漢音 ボウ

「蒙」は、「易」の六十四卦の一つで、微かで味いさまを示す。三二の形。

唐の李瀚の撰になる『蒙求』は、『易』の「蒙」卦にいう「童蒙 我に求む」（七月二十四日参照）にちなんだ書名である。「童蒙」は子ども、また無知蒙昧の意。上古から南北朝にいたる人物の伝記や逸事を四字句に盛りこむ。

たとえば、「蒙恬製筆」は、秦の始皇帝の臣下である蒙恬（蒙は姓）がはじめて毛筆を製造したことを、「蒙恬 筆を製る」という四字句であらわしたもの。児童が著名な人物の事績を記憶し、みずからの文章作成に役立てることがでる。『蒙求』は『千字文』と並んで幼学書（幼童用の教科書）の一つに数えられる。つとに日本に渡来して大いに流行し、「勸学院の雀は『蒙求』を囀る」とまでいわれたことが知られる。

○七月二十六日

常用漢字

求

呉音 グ

漢音 キユウ (キウ)

訓 もとめる

動物の毛皮を描いた象形文字。「裘」(かわごころも)の原字。「もとめる」意は、この字を借りて行われたもの。

いわゆる「求人」は、人を求めること、人材をさがし求めること。戦国時代の末期、秦の呂不韋が食客を集めて編纂させたという『呂氏春秋』(『呂覽』)慎行論に「求人」の篇名が見える。

『孟子』離婁上には、「求全の毀り」の語がある。

「虞らざるの譽れ有り、全きを求むるの毀り有り。」

「虞らざるの譽れ」(不虞之譽)は、思いがけなく得た名譽。「全きを求むるの毀り」は、行いを完全無欠にしていながら降りかかる非難のこと。世間の評価や評判が当てにならないことを説いた孟子の言。

○七月二十七日

人名用漢字 簡体字

丑 丑

呉音 チユウ (チウ)・チユ

漢音 チユウ (チウ)

訓 うし

手の先を曲げて、物をつかむさまにかたどった象形文字。「扭」(手をねじ曲げてつかむ)・「紐」(糸をひねって組みあげたひも)・ひねって結びつける・印のつまみ)・「鈕」(締め金具)などの旁の「丑」は、ねじる・ひねる意をあらわす。

十二支の第二位に用いる。動物では、牛。方角では、北北東。時刻では、午前二時、およびその前後の二時間。五行では、土。

立春(二月四日)立夏(五月六日)立秋(八月八日)立冬(十一月八日)の十八日前を「土用の日」という。「土用干し」は、立秋前の土用の晴天に、梅の実と紫蘇を三日三晩干すこと。

「土用の丑の日」にウナギを食べるのは、江戸の平賀源内がこの日「う」の付くものを食べると夏バテしないという俗習にヒントを得たものという。『万葉集』卷十六には、夏痩せにウナギがいいから、取って食えと大伴家持が詠じた和歌二首がある。ウナギは万葉仮名では「武奈伎」と表記する。

○七月二十八日

簡体字

鰻 鰻

呉音 バン

漢音 マン

訓 うなぎ

「ウナギ」といえば、すぐに「鰻」という漢字が想い浮かぶが、明の李時珍の『本草綱目』卷四十四「鱗部魚類」には、「鰻鱺魚」の称であられる。「鰻」「鱺」と呼ばれるタウナギの類もいて、「鰻」と「鱺」は文字表記の上でも混用される。その形状から水神の総帥である「龍」が連想され、雨をつかさどる水神、龍神として信仰され、またその形態から生殖崇拜と結びついて夫婦相合、子授けの神とも信じられた。

明の短篇小説集『警世通言』卷二十所収の「計押番金鰻産禍」は、宋の徽宗の時代、金明池で金鰻を釣りあげた北司(枢密院)の押番の計安の一族が減じる物語である。金明池からの帰り道、計安は

魚籠びくの中から、「わたしは金明池を掌管する者である。放せば富貴にするし、害すれば家中の者を非命に殺してくれる」との声を聞いた。しかし、妻は亭主の留守に金鰻を料理してしまう。悶々とする計安をよそに、妻は懐妊して娘の慶奴を生み、成人した慶奴の結婚話以来、不幸が重なり、計安夫妻は殺害され、慶奴も罪を得て処刑される。金鰻をめぐる因果応報の物語である。

○七月二十九日

常用漢字 旧字体

食 食

呉音 ジキ・ジ・イ

漢音 ショク・シ・イ

訓 くう・くらう・たべる

「食」は、ふた(亼)をしたさまと食物を器に盛ったさまをあわせた会意文字で、食物ひいては食べる意をあらわす。

「食は民の本なり、民は国の基なり」は、周の辛斲きんの撰という『文子』上仁に「老子曰く」として引かれる語。『三国志』呉志の賀邵がしやう伝には、「民は国の本にして、食は民の命なり」がある。

いわゆる衣・食・住の中で、生命の維持に最も関わる「食」はたえず人民生活の根本に位置づけられ、俗に「衣食足りて礼節を知る」といって、生活が安定してこそ道徳心が高まる。『管子』牧民には、「衣食足れば、則ち榮辱(名譽と恥辱)を知る」とある。

「食指」は、人差し指。「食指動く」は、人差し指が自然に動くこと。春秋時代、鄭の公子である宋そうが鄭公に献じられたスッポンを見て、人差し指が自然に動いたので、やがてご馳走にありつく前兆だといった(『春秋左氏伝』宣公四年)。転じて、物を求める心が起こることをいう。

○七月三十日

常用漢字

牛

呉音 ゴ

漢音 ギユウ(ギウ)

訓 うし

「牛」は、牛の頭部の形をかたどった象形文字。前方につき出た角のある形(𠂔)に描かれ、後方に曲がった角をもつ羊(𦍋)と区別される。

『楚辞』天問や『山海経』大荒東経によると、殷の王子の王亥が牛を飼いならしたという。いけにえの動物の一種で、春秋時代、諸侯が盟約するとき、いけにえの牛の左耳を裂いて、その血をすすって誓いあった。盟主が牛耳をとったので、「牛耳を執る」は盟約をつかさどる意。転じて、頭かしらとなつて実力で支配すること(『春秋左氏伝』定公八年)。

「尸子」にいう「食牛の氣」とは、牛をも食べるほどの大きな気性、意気をいう。「吞牛の氣」とも。呉の牛は、南の暑い国のことなので、月を見ても太陽と思いきんで喘あえぐという。「呉牛 月に喘ぐ」は、『世説新語』言語篇に見える。

○七月三十一日

常用漢字 旧字体

暑 暑

呉音 ショ

漢音 ショ

訓 あつい

「暑」は、「日」と音符「者」とから成る会意兼形声文字。「者」は、台の上で火をたくさまで、焼く、煮る、あつい意をあらわした。

日光が焼けるように照らしつけ、うだるように暑いことを意味するのが「暑」である。

「暑日」は、夏のあつい日。「暑月」は、暑い月、夏の季節、また陰暦六月。「暑伏」は、暑月三伏の意で、盛夏を意味する。三伏は、夏至のあとの三番目の庚の日（初伏）、四番目の庚の日（中伏）、立秋のあとの最初の庚の日（末伏）で、起ころうとする陰気が陽気に押されて蔵伏している。

『淮南子』人間訓に、「冬は則ち寒凍、夏は則ち暑傷。」という。寒凍は、寒さに凍えること。暑傷は、暑さのために病気になること、暑気あたり。往時の生活の厳しさがしのばれる。

○八月一日

人名用漢字

朔

呉音 サク

漢音 サク

「朔」は「月」と音符「苜」とから成る会意文字。「苜」は、逆さにする、もとへ返る意。「朔」は、月が一周してもとに戻ることに。「ついで」は、ひと月が終わって、暦の最初にもどった日をいう。月の第一日。「朔望」は、朔日と満月の十五日。

『宋書』符瑞志に、「朔にして生じ、望にして落つ。」とある。古のこと、帝堯が在位した七十年、階をはさんで蓂莢という草が生え、月のはじめに一葉を生じて、月の半ばで十五葉を生じ、十六日以降、日ごとに一葉が落ち、晦日におよんで尽きた。これによって帝堯は日数を知ったという。

「朔」には、北、北方の意味もある。「朔」は、北方、塞外の地。

敗れて匈奴の將軍となった前漢の李陵が書いた「蘇武に与うるの書」に、「幾んど朔北の野に死す。」の字句がある。

○八月二日

常用漢字

炎

呉音 エン(エム)

漢音 エン(エム)

訓 ほのお

「炎」は、「火」を重ねて、火の盛んに燃える意をあらわす会意文字。訓の「ほのお(ほのほ)」は「火の穂」の意にもとづく。

『書経』胤征の「火 崑岡に炎ゆれば、玉石俱に焚く」は、玉を産出する崑崙山に火事があると、玉と石がともに焚ける意。官吏の行いがいい加減で、善悪を見極めず民を罪することにたとえる。

唐の柳宗元の「宋清伝」に、「吾 今の人に交わる者を観るに、炎にして付き、寒にして棄つ」という。「炎」は、人の勢位の盛んなこと、「寒」は、その衰微したこと。交友関係において、相手が権勢のある時には付きしたが、権勢の衰えた時には棄て去る意。人情の軽薄なことにたとえていう。

「炎涼」は、暑いことと涼しいこと。世の変遷、栄枯盛衰、人情の厚薄にもたとえる。「炎熱」は、厳しい暑さ。仏教の「炎熱地獄」は、猛火に囲まれ、その熱に苦しむ八大地獄の一つ。

○八月三日

常用漢字

熱

热

呉音 ネット・ネチ

漢音 ゼツ

訓 あつい

「火」と音符「執^{セツ}」とから成る「熱」は、火が燃えてあつこと、あつき、ねつ、あつくする意。「執」は、勢いの意とも。

「熱血漢」は、わきたぎる血潮、血の沸きかえるほどの激しい意気を持ち主をいうが、「熱血」は体の外に流れでた体温のあたたかさが残る生き血をもいう。「熱腸」は、悲しみで腸が煮えかえるような思い。「熱腹」は、思いやりや情があついこと。「熱心」は、物事に深く心を傾けること。

「熱中」は、物事に夢中になる、一心になる意。『孟子』万章上には、「仕えれば則ち君を慕い、君に得られざれば則ち熱中す」とあり、「熱中」は、ここでは仕進に熱心なこと。ちなみに、「熱中症」は、暑熱の環境の中で発生する高温障害の総称。

『老子』第四十五章には、「躁^{ソウ}は寒に勝ち、静は熱に勝つ」という。躁^{ソウ}がまわれれば寒さをしのげ、静にしていれば熱さをしのげる意。寒・熱に対する人間の自然な対処法でもある。

○八月四日

常用漢字

箸

呉音 ジョ (チヨ)
漢音 チヨ
訓 はし

「箸」は、「竹」と「者」とから成る会意兼形声文字。「者」は、くつつける、ひろう、はさむなどの意をあらわす。食物をとる竹製のハシの意。

漢の三年(前二〇四)、項羽が急に漢王劉邦を滎陽に囲んだとき、漢王は酈食^{れいき}其の進言によって、楚の力を弱めるため、かつて秦が滅ぼした六国の後裔に印綬を授けて佩用させることにした。張良

は国外から帰って漢王からこれを聞くと、「臣請う 前の箸を借りて、以て之を籌^{はか}らん」とその計略の失敗するいわれを説いた。「箸を借りる」は、箸を借り用いて指図すること。一説に、「箸」は「著」に通じるので、著名なことを借りて論ずること。

現代中国語では、はしを「筷子^{クワイツ}」という。昔、船上では、「箸」の発音が「住」(とどまる意)に相通じるので、忌み嫌って「快子^{クワイツ}」「筷子」と呼んだ。

○八月五日

常用漢字

旧字体

簡体字

呉音 セン

扇 扇 扇

漢音 セン
訓 おうぎ

「扇」は、「戸」と「羽」とから成る会意文字。「戸」は、とびら、「羽」は、両側に開閉する意。開閉する扉の意から、転じて、うちわ、あおぐ意をあらわす。中国における「扇」は、いわゆる「うちわ」で、その形状から「团扇」とも呼ばれる。折りたたみ式のもの「摺扇^{しゅうせん}」「摺畳扇」と呼ばれるが、明代に日本から輸入したことが明らかである。日本語の「扇子」は、おうぎ。

漢の成帝の寵を得た班婕妤の「怨歌行」は、斉の特産の紈素^{しらひも}で「合歡扇」とよばれる二枚張り合わせたうちわを作って帝にプレゼントすることを詠うとともに、

常に恐る秋節至りて、涼風の炎熱を奪わんことを。

篋^{きやうし}筒の中に葉捐せられて、恩情 中道に絶えなん。

涼風の吹く秋の到来とともに、篋筒にしまい忘れられてしまうと、寵愛を失う悲しみを唱っている。成帝は趙飛燕と合徳の姉妹

を寵愛するのあまり非命に倒れたと史伝が伝える。

○八月六日

常用漢字 簡体字

鐘 钟

呉音 シユ

漢音 シヨウ

訓 かね

「鐘」は、「金」と「童」とから成る会意兼形声文字で、かね、つりがね。「童」は、「撞」すなわち「つく」意。

「編鐘」は、中国古代の宮廷楽器で、大きさ・音階の異なる青銅の鐘を並べて台に吊したものである。多くは十二律にあわせた十二の鐘を一組みとした。一九七八年、湖北省随州市近郊の二千四百年前の曾侯乙墓から発見された編鐘は、五オクターブ六十五個で、上段十九鐘、中段三十五鐘、下段十三鐘に配架される。鐘は、正面と側面とで二つの音階がでる「一鐘双音」。鐘には古い篆書の銘文が二千八百字余り彫られている。音律も正確で、美しい音色が復原され、古代の音楽を伝えていく。

「鐘鼓」は、鐘と太鼓。音楽を演奏するときの代表的な楽器。『詩経』周南の第一篇「閔雎」は、「窈窕たる淑女、鐘鼓 之を樂しまん」と結ぶ。君子とそよき配偶者が音楽を樂しみ、相和する、いわゆる「閔雎の化(教化)」を説きあげている。

○八月七日

常用漢字 旧字体 簡字体

炉 爐 炉

漢音 ロ

「炉」は「爐」の俗字。「爐」は、「火」と「盧」の会意兼形声文字。つば形のまるいコンロ、あるいはハコの意をあらわす「盧」と「火」により、火を燃やすカマドやコンロ、イロリの意。

「夏炉冬扇」は、後漢の王充の『論衡』逢遇篇に出現する語。夏の炉と冬の扇の意で、無益な言論や才能にたとえる。

明の小説『西遊記』に登場する「八卦爐」は、太上老君(老子)が煉丹に用いる炉で、乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌の八卦からなる。天上界で、不老長生の蟠桃、うま酒の玉液瓊漿と八珍百味を盗み食らい、不老不死の金丹を飲みつくした孫悟空は、追っ手の顕聖二郎真君の犬にガブリと噛みつかれて捕縛される。しかし、すでに金鉄の肉体となっていたため、八卦爐に放りこまれて煅煉される。風の位置の巽に潜りこんで火を逃れたものの、目は煙のため「火眼金睛」となって、逃げ出す。いわゆる「大鬧天宮(大いに天宮を鬧がす)」の一節である。

○八月八日

常用漢字

鼓

呉音 コ

漢音 コ

訓 つづみ

「鼓」は、たいこ・つづみをあらわす「壺」と、棒でたたく「支」とから成る会意文字で、つづみを打つ意。転じて、たいこ・つづみ。後漢の許慎の『説文解字』では、「鼓」(つづみ)と「鼓」(つづみを打つ)の文字を区別していたが、六朝以後は混用されて「鼓」を用いている。

「鼓腹擊壤」は、帝堯のとき、ある一人の老人が天下の太平無事

を楽しんで、腹つづみを打ち、土塊を打ちながら、堯の徳を称えて歌をうたったという故事。

「鼓盆」は、「盆」をたたくこと。『莊子』至楽篇に、莊子が妻を亡くしたとき、盆をたたいて歌ったことが見える。転じて、妻に死に別れること、妻を失うことにたとえていう。

「金鼓」は軍用の鐘と太鼓。進軍には「鼓」、止まるには「鐘」を使う。『孫子』軍争篇に「言うとも相聞こえず、故に鼓鐸を為る」とある。鳴り物を使うのは兵士たちの耳目を一つにするため。

○八月九日

常用漢字

本字

古字

呉音

ワ

和 味 穌

唐音

オ

漢音

カ(クワ)

訓

やわらぐ・やわらげる・なごむ・なごやか

「和」は、「口」と音符「禾」とから成る。「禾」は、まるく垂れた穂の形で、あわせる、加わる意を示す。声をあわせ心をあわせて、まるくまとまる意。また、そのやわらいだ状態をいう。

「和して同ぜず」は、『論語』子路篇に典する語。「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」との対句形式によって、付和雷同することのない生き方を説いている。

『老子』には「和光同塵」の語がある。「其の光を和らげ、其の塵に同じうす」。知恵の光、自己の才能を和らげかくして俗世間にまじわり生きること。仏教では、仏が衆生を救うため知恵の光をかくして塵のような人間界に姿を変えてあらわれること。

わが国では、聖徳太子の十七条憲法(六〇四年発令)の「和を

以て貴しと為す」の語句がとりわけ知られるが、『礼記』儒行篇の「礼の和を以て貴しと為す」、『論語』学而篇の「礼の和を用て貴しと為す」といった先行する例が認められる。

○八月十日

人名用漢字

呉音

ワ・イ(ヰ)

倭

漢音

ワ・イ(ヰ)

「倭」は、「人」と音符「委」とから成る。「委」は、まかせる意で、従順、したがうこと。また、「禾」はしなやかに穂を垂れた姿で、女を添えた「委」は女のなよなよした姿を示し、「倭」は、しなやかで背の低くまがつた小人をあらわすともいう。

中国では、昔、日本および日本人を「倭」の字で指した。『後漢書』光武帝紀に、東夷の倭奴国王が使者を遣わした事、東夷列伝の「倭」に、建武中元二年(五七)に倭奴国が朝貢し、光武帝が印綬を賜ったことが記載される。後の天明四年(一七八四)、福岡市の志賀島で出土した「漢委奴国王」の金印は、「委」が「倭」に通じることから、光武帝の賜った印綬に当たると見られている。

『三国志』魏書の東夷伝の「倭人」の伝には、「倭人 帯方の東南の大海の中に在り」と「倭人」の語をもって記載される。いずれも当時の中華思想の立場から、卑しんで用いられた語である。なお、東夷の「夷」は東方に住む異民族の呼び名。

○八月十一日

簾 簾 簾

人名用漢字 旧字体 簡体字
呉音 レン
漢音 レン
訓 すだれ

「簾」は、「竹」と音符「廉」とから成る。「廉」は、つらねあわす、きちんとそろう意。「簾」は、細い竹を連ねあわせた、あるいは竹をそろえて編んだスタレをいう。竹製のスタレを「簾」というのに対して、布製のスタレを「帘」と區別して使う。

平安時代、中宮定子から「香炉峰の雪はいかならん」と尋ねられた清少納言は、すぐさま御簾を撥けてみせたことを『枕草子』に伝えている。唐の白居易の詩句「香炉峰の雪は簾を撥けて看る」に支えられて、大意即妙にパフォーマンズで応対したところに清少納言の才学をうかがうことができる。

花果山水簾洞は、『西遊記』のスーパーモンキー孫悟空の根拠地。瀑布が入口をおおい隠した天然の要害で、まさしく別天地。「垂簾の政」は、御簾を下ろして政治を執ること。年少の天子にかわって太皇太后・皇太后が執る政治をいう。「垂簾朝政」。

○八月十二日

蓋 蓋 盖

常用漢字 旧字体 簡体字 慣用音
呉音 カイ・ゴウ(ガフ)
漢音 カイ・コウ(カフ)
訓 ふた

「蓋」は、「艸」と「盍」とから成る会意兼形声文字。「盍」は「去」

と「皿」とから成る会意文字で、皿にふたをかぶせる、ふたの意。「蓋」は、むしろや草葺きの屋根をかぶせること、草のふた、引いては、おおう意。訓の「けだし」は、「思うに」と推量し、また「そもそも」「いったい」と説きだす語。また、「何不」の二字を「蓋」の一字が代用し、「なんぞ…ざる」と再読する。

「傾蓋(蓋を傾く)」は、孔子と程子が道で出会って、互いに車の蓋を傾けて挨拶し、話しこんだ故事から、すぐに旧知のように親しくなることにたとえる。

「蓋世(世を蓋う)」は、世の中をおおいつくす意。劉邦と天下を争いながら「四面楚歌」の窮地に陥った霸王項羽は、歌う。

力は山を抜き気は世を蓋う、時に利あらず驩逝かず。

驩逝かざれば奈何すべき、虞や虞や若を奈何せん。

世の中をおおいつくす気概の持ち主に時勢は味方することなく、騎乗する愛馬驩も困憊して窮する中、愛おしい虞美人を思いやつた詠唱として人口に膾炙する。

○八月十三日

瓜

人名用漢字
呉音 ケ(クエ)
漢音 カ(クワ)
訓 うり

「瓜」は、つるの中にウリがまるく実っている形を描いた象形文字で、ウリをあらわす。

ウリの熟する時を「瓜時」とよぶ。陰暦七月。春秋時代、斉の襄公が家臣をウリの熟するときに守備に遣わし、翌年のその時期に交代すると約束した(『春秋左氏伝』莊公八年)。任期が満ちること、

任務を交替する時期をいう。「瓜代」「瓜に及ぶ」とも。

「瓜田に履を納れず」は、瓜畑の中で履が脱げて、瓜を盗んだと疑われないよう、うつむいて履を取らない意。「履に納れず」と訓じて、履をはきなかない意ともいう。「古楽府」君子行の「李下に冠を正さず」の対句で、人から疑われる行為をしないたとえ。「李瓜の嫌」は、人から疑われやすいことをすること。

「破瓜」は、女子の十六歳、男子の六十四歳。「瓜」の字を二つに分けると八と八になるので、二八十六、八八六十四となる。

○八月十四日

常用漢字

力

呉音 リキ

漢音 リヨク

訓 ちから

「力」は、筋肉をより上げた腕、腕の筋肉をすじばらせてがんばるさまを描いた象形文字で、ちから、つとめる意をあらわす。

「力士」は、力の強い男の意。相撲取りの意は、日本での用法。骨折や努力を惜しまない人を「力子」という。『後漢書』樊曄はんたつ伝に、「游子は常に貧に苦しみ、力子は天の富ます所。」というのは、努力が報われることを説いている。

「力学」は、努力して学ぶこと。唐の白居易は、「力学して疲れを知らず」と詠じる。今日では物理学の一部門で、物体に働く力と物体の運動の関係を研究する科学の意味でもっぱら用いる。

「力は山を抜き気は世を蓋う」は、劉邦と天下を争い垓下に閉まれた霸王項羽の悲歌慷慨の詩句（八月十二日「蓋」参照）。

○八月十五日

常用漢字

旧字体

簡体字

呉音 ゴン

権 權 杈

漢音 ケン（クエン）

「権」は「木」と音符「瞿」により、もとは木の名をあらわす。「権」は「懸」（かける意）に通じて、棒ばかりの重り、分銅の意。軽重を測ることから、バランスをとる意を含む。力や重みから、権利、権威、権勢の意にも用いる。「人權」は、私たちが社会生活で幸福に生き暮らすために必須の権利である。

物事の釣りあいやバランスを「権衡」という。「権」がはかりの重り。「衡」は、はかりのさお。『荀子』大略篇には、「礼の国家を正すに於いてや、権衡の軽重に於けるが如きなり」のように、「権衡」をもって国家を正す礼にたとえる。

『孫子』軍争篇には、武田信玄の「風林火山」の典拠となる言説に続いて、「郷を掠めるには衆を分け、地を廓ひろむるには利を分かち、権を懸けて動く。」と説く。「権を懸けて動く」は、重りを衡に懸けて重さを量るように、事の軽重を推し量って行動をとる意。その判断に事の成否がかかる。

○八月十六日

常用漢字

呉音 ギヨウ（ギヤウ）

衡

漢音 コウ（カウ）

「衡」は、「集」と音符「行」とから成る会意兼形声文字。「集」は、

大きな角。「行」は、横にまっすぐ渡す意。「衡」は、牛が人を突かぬよう、牛の角に横に縛りつけた棒、つなぎ。転じて、広く横木、竿秤の棒などをいう。

二本の柱の上に横木を渡してつくった冠木門を、「衡門」という。転じて、粗末な家、世俗を避けて暮らす隱者の家を意味する。『詩経』陳風の「衡門」に、

衡門の下、以て棲遲すべし。

と唱う。「棲遲」は、ゆったりと安らかに暮らすこと。その境地は、貧に甘んじて飢えをも楽しむ脱俗のそれである。

「衡を争う(争衡)」は、優劣をあらそう意。庾信の「竹杖賦」に、「楚漢 衡を争い、袁曹競いて逐う」と詠じられる。「衡を持す(持衡)」は、はかりを平らかに保つこと。後世、科挙試験の主司を「持衡」と呼んだ。

○八月十七日

常用漢字 旧字体 簡体字 慣用音 ジュウ

呉音 シユ

漢音 ショウ

訓 たて

縦 縦 纵

「縦」は、「糸」と音符「從」とから成る会意兼形声文字。「從」は、つきしたがう、つきだす意。糸が連なつてタテに長くのびること、タテにつきだした糸から、タテの意となり、タテにどこまでものびるので、のび放題、ほしほしのままの意に用いる。

「縦横」は、タテとヨコ。また、南北と東西。思うまま、自由自在をも意味する。『漢書』の芸文志は、「諸子百家」の一つに「縦

横家」を録する。「縦」は「從」とも表記される。

戦国時代、新興勢力の秦が台頭する中、蘇秦は、韓・魏・趙・燕・楚・斉の六国を「縦(從)」すなわち南北に合わせて、西の秦に對抗する「合縦(從)」策を説いた。また、張儀は、六国をそれぞれ「衡」すなわち東西に秦と連ならせ、秦に服事させる「連衡」策を唱えた。いわゆる「合縦連衡」と並称される外交策が遊説される一方、やがて秦王政(秦の始皇帝)が天下を統一する。

○八月十八日

常用漢字

呉音 マイ

漢音 ベイ

訓 こめ

米

「米」は象形文字で、黍の穂に小さな実がならんでいるさま、四方に点々と小さな穀物や米が散らばったさま。穀物の実、その小さなつぶ、その脱穀したもの。「六米」は、黍・稷・稻・粱・苽・大豆の六種類の穀類。引いては、稲の実、脱穀したコメ、よね。

「米粟」は、「米」がもみながらを取りのぞいた穀物、「粟」がもみのままのもので、穀物の総称。孔子の弟子の子路は、貧しくも両親に孝養を尽くし、百里の外から米を運びいれたと伝える(『孔子家語』致思篇)。俗に「百里に米を負う」と称される。

『莊子』庚桑楚に、「髪を簡びて櫛り、米を数えて炊く」とある。『淮南子』泰族訓には、「薪を秤りて爨き、米を数えて炊くは、以て小を治むべくして、未だ以て大を治むべからざるなり」と、こせこせとして大事を治めきれないことにとえる。

「米」の字を分解すると、「八十八」になることから、古くから

八十八歳を「米寿」「米年」とよんで祝った。

○八月十九日

常用漢字

穴

呉音 ゲツ (グエチ)

漢音 ケツ

訓 あな

「穴」は、横穴式住居の入口の形を描いた象形文字で、アナの意をあらわす。家の意の「宀」と左右に分ける「八」との会意文字で、洞穴を掘りわけて住む穴居住宅を意味するともいう。『易経』繫辭下に、「上古は穴居して野処せり」とある。山西省・陝西省・甘粛省などの黄土高原地帯には、現在も「窑洞」とよばれる横穴式住居に暮らす人々がいる。

「穴見」は、穴の中から見ること、見識の狭いこと。「穴処の徒」は、穴にいて見識が遠くに及ばぬ人、遠くまで見通せない人。「穴隙を鑽る」は、牆壁に穴をあける意。『孟子』滕文公下に、「父母の命、媒妁の言を待たず、穴隙を鑽りて相窺う」とあるのは、男女が勝手に相手を垣間見ること、淫奔の義を示した。

「虎穴に入らずんば虎子をを得ず」(『後漢書』班超伝)や「千丈の堤、螻蟻の穴を以て潰ゆ」(『韓非子』喻老篇)といった故事成語も行われる。

○八月二十日

常用漢字

原

慣用音 ガン (グワン)

呉音 ゴン

漢音 ゲン (グエン)

訓 はら

「原」は、ガケをあらわす「厶」とイズミをあらわす「泉」とから成る会意文字。ガケの岩間から水が湧きでているさま、また、その湧きでたイズミの意。「源」の原字で、みなもとの意をあらわし、「遼」(高く平らな地)に通じて、はらの意に用いる。

「原泉」は、「源泉」の意で、『孟子』離婁下には、「原泉 混混として、昼夜を舍かず」と、水がたえず湧きでるさまを記す。

「原始」は、はじめ、起こりの意で用いるが、「原」には、根本をたずねる意がある。『易経』繫辭上に、「始めを原ね終わりに反る」といった語例がある。「原稿」は、原の稿本。印刷物(版本)のもことなる文書などという。

「燎原の火」は、原を燎く火。野原に放たれて盛んに燃える火。その勢いの盛んなたとえ。『春秋左氏伝』隱公六年に「商書に曰く」として、「悪の易きや、火の原を燎くが如く、嚮い邇づくべからず」とあり、悪念の長じやすいたとえとなる。

○八月二十一日

常用漢字 簡体字

傾 傾

漢音 ケイ

訓 かたむく・かたむける

「頃」は、あたまをあらわす「頁」と、かわる意の「化」とから成る会意文字で、頭をまげ、かたむける意。しかし、田畑の単位にも用いられたため、「頃」に「人」を加えて、かたむく、かたむける意に用いた。

唐の白居易(字は楽天)は、玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスを題材とする「長恨歌」の冒頭、「漢皇 色を重んじて傾国を思う」と詠いはじめめる。「傾国」は、国を傾ける意で、一国をも危うくするほどの美女、絶世の美女をいう。「傾城」も、城を傾ける意で、同様の語。「城」は、まち、都市の意。より古くは、漢の武帝の寵臣李延年が「北方に佳人有り」の歌詞の中で、「一たび顧みれば人城を傾け、再び顧みれば人国を傾く」と詠じた(『漢書』外戚伝)。この佳人こそ、後に武帝の後宮に入る妹の李夫人であった。日本では「傾城」を、おいらん、遊女の意に用いる。

○八月二十二日

常用漢字

呉音 ケチ (クエチ)

漢音 ケツ (クエツ)

訓 きめる・きまる

決

「決」は、「水」と音符「夬」^{ケツ}とから成る会意兼形声文字で、堤防が水によってえぐりとられることをあらわす。堤防が切れる意から、決まる意に転じた。「夬」は、えぐりとする意。

『史記』秦始皇本紀に、「河決れて復た壅ぐべからず」とあるのは、黄河が決壊したことをいう。「決河の勢」^{いさおひ}は、堤防が決壊して、河水があふれ出てくるすさまじい勢いのこと。抑え鎮めようとしても抑えきれない勢いのたとえ。『淮南子』兵略訓に、「是の故に善

く兵を用いる者は、勢い積水に千仞の隄を決らるるが如し」との用例が見える。

「決眚」^{しせい}は、まなじりが裂ける、眼を怒らす、目を見張る意。魏の曹植の「鼙舞歌」孟冬篇に、「目を張き眚を決き、髪は怒りて冠を穿つ」との怒りの表現が見えている。

「決死」は、「死を決す」、死ぬ覚悟を決める意。

○八月二十三日

人名用漢字

旧字体

簡体字

呉音 ゼン

蟬 蟬 蟬

漢音 セン
訓 せみ

セミは、カメムシ目・頸吻亜目・セミ上科に分類された昆虫の総称。オスの腹腔内に発音筋・発音膜・共鳴室などの発音器官がある。「蟬語」「蟬声」「蟬吟」「蟬鳴」は、その鳴き声、その鳴くことをあらわす。「蟬翼」は、軽い、薄い、美しいことにたとえる。「蟬鬢」は、うすく透いて蟬翼のように見える結髪をいう。

『淮南子』説林訓にいう「蟬は飲みて食わず」は、蟬が樹液だけを飲んで、物を食わない意で、蟬の食性の清潔さが称えられる。陸雲の「寒蟬賦」に、蟬は「文」(頭上に絞りがあがる)「清」(気を含み露を飲む)「廉」(黍稷を享けない)「儉」(巢にすまない)「信」(候に応じて常を守る)の「五徳」を備えたと詠せられる。

蟬は、夏の間しか生きず、冬場に降る雪を知らないもので、見聞の狭いことにたとえ、『塩鉄論』相刺には「睹ざる所を以て人を信ぜざるは、蟬の雪を知らざるが若し」との言説が見える。

セミの抜け殻は「蟬蛻」とよばれ、止痒、解熱の漢方薬。

○八月二十四日

蟻 蚁

簡体字

呉音 ギ

漢音 ギ

訓 あり

アリは、ハチ目アリ科の昆虫で、体は頭・胸・腹の三部に分かれ、胸部と腹部の間が細くくびれる。女王蟻を中心に、雄蟻・働き蟻（職蟻）の階層によって群棲しながら共同的社会生活をいとむ。「義」は、格好のいいこと、キチンとしている意で、その規則正しい生活を示している。「蟻集」「蟻聚」は、蟻のようにたくさん集まること。蟻は降雨を予知するから、「蟻穴（蟻塚のあな）に封すれば、「雨る」とその予兆が伝えられる。

『韓非子』諭老篇に、「千丈の堤、蟻の穴を以て潰ゆ」という。「蟻」は、ケラ。日本では「千丈の堤も蟻の穴より崩れる」、「蟻の穴から堤も崩れる」。小事をおろそかにすると、大きな禍をまねくとの戒めである。

「蟻夢」は、唐の淳于棼が夢で蟻の国、槐安国の駙馬（公主の婿）となり、栄枯盛衰を経験する『南柯太守伝』のものがたりを指す。人生のはかなさを夢を通して語った唐代伝奇小説の一つ。

○八月二十五日

常用漢字

呉音 ショウ（シャウ）

漢音 セイ

訓 い

井

「井」は、井戸の四角いワクの形を描いた象形文字で、いどの意。

類似する「井」の「丶」は、いどの中、あるいはいどの清水がたまること。「井」も、いどの意に用いられるが、日本では、ドンブリ

①厚みのあるはち、②職人などが着る腹掛けの前の物入れ）の意に借りて用いる。

井戸のある所に人が集まり、物があればこれを売って市をなす。民衆が売り買いする所、引いては市中市街を「市井」という。

古く劉宋の鮑照の「字謎三首」の第一首に次の詩がある。

二形一体（二の形が一つの体をつくり）

四支八頭（四つの手足（肢体）に八つの頭）

四八一八（四八三二と一八が八で、四十）

飛泉仰流（つるべで汲みあげ玉と飛び散る水しぶき）

文字当てのナゾナゾで、答えは「井」。文字の形状と「離」や「拆」とよばれる分解、汲みあげる取水法に支えられた絶妙の字謎の詩である。

○八月二十六日

常用漢字

慣用音 チン

呉音 シン

漢音 シン

訓 まくら

枕

「枕」は、「木」と音符「尢」から成り、頭で押しさげる木製のまくらの意をあらわす。「尢」は、枷で人の肩を押さえて、下に押しさげるさまという。甲骨文では、牛を川にしずめるさま。

「夢枕」は、これを用いて寝ると夢をみることできるまくら。「邯鄲の夢枕」といえば、唐代に著された小説『枕中記』のものが

たりをいう。邯鄲道中で、耕作地に向かう青年盧生が、老いた道士呂翁から陶磁の枕を借りて昼寝をしたところ、榮枯盛衰にみちた一生涯を夢みて、人生のはかなさをさとするストーリー。店主が炊きはじめた黄梁がまだ炊きあがる前の短い時間にみた夢であったことから、「黄梁一炊の夢」ともよばれる。

「獾(貌)」は、中国の想像上の動物で、体形は熊、鼻は象、目は犀、尾は牛、足は虎に似るといい、歯が強く鋼鉄を食い、かつ人の悪夢を食うと伝えられる。

○八月二十七日

人名用漢字

梁

呉音 ロウ(ラウ)

漢音 リヨウ(リヤウ)

訓 はり

「梁」は、「水」と「办」に「木」を加えて成りたつ。岸に柱を立てて、水の両側に架けた橋をあらわす。家の棟をささえるはり・うつばり、川の瀬で魚をとらえるやなの意もある。

『礼記』檀弓篇に載る、孔子が自分の死を予知してうたった歌に、「泰山其れ頽れんか。梁木其れ壞れんか。哲人其れ萎まんか」の語がある。泰山は衆山の仰ぎみる山、梁木は衆木の依る木で、ともに最も重要なものであることから、賢人の死をたとえて「泰山頽れ梁木壞る」という。

「梁上の君子」は、梁の上の盗人を指していった語。『後漢書』陳寔伝に、部屋の梁の上に盗賊が潜んでいるのを知った陳寔は、子や孫たちをよぶと、「人は自ら勉めて生きなければならぬ。不善の輩も生来の悪人ではなく、慣習となって悪に染まったもので、梁

上にいる君子こそがそれだ」と訓戒して、盗賊を改悛させたと伝える。「梁上の君子」は盗人の異名となった。

○八月二十八日

簡体字

塵 尘

呉音 ジン

漢音 チン

訓 ちり

「塵」は「鹿」と「土」とから成る会意文字。シカの群れが走り去ったあとに土ほこりがたつことを示し、ちりの意をあらわす。

人や車馬が通った後にたつ土ほこりを、「後塵」という。晋の石崇が、権力者の車が土ほこりをたてて通過するのに対して、後方から拝したと『晋書』石崇伝に記される。「後塵を拝す」は、権勢ある人にこびへつらうことを意味する。

「塵土」「塵界」は、けがれた世、俗世間をいう。晋の陶淵明は「園田の居に帰る」の詩篇の中で、長らく俗塵にまみれて役人生活を送っていたことを、「誤って塵網の中に落つ」と表現する。「塵網」は、人をがんにがらめに絡めとる世俗の網の意。

その昔、魯の人である虞公は、声を発すれば清越で、その歌声が梁の上の塵を動かしたと、『劉向別録』にある。「梁塵」は巧みな音楽をも意味し、わが国の後白河法皇の撰じた歌謡集『梁塵秘抄』に命名されてもいる。

○八月二十九日

常用漢字

壁

呉音 ヒヤク

漢音 ヘキ

訓 かべ

「壁」は、「土」と音符「辟^{ヘキ}」とから成り、家の中や外の平らかな壁の意をあらわす。「辟」は、表面が平らで薄い意とも、おおう、ふせぐ意ともいわれる。

俗に「壁に耳あり、障子に目あり」というが、明の小説『金瓶梅詞話』第八十六回に、「牆に縫^{かまね}有り、壁に耳有り」の語が確認される。「壁に耳有り」は、「隔牆^{かべ}に耳有り」ともいう。

漢の匡衡^{きやうこう}は、貧乏で灯火が無いので、壁をうがって隣の家の明かりで書物を読んだ(『漢書』匡衡伝)。この苦学のさまは、「壁光」あるいは「壁を鑿^{うが}ちて光を偷^{ぬす}む」「壁を鑿^{うが}ちて書を読む」の語で顕彰される。

「壁立」は、壁が垂直に切り立つこと。「壁立千仞^{じん}」は、巖石が高く聳えるさまをいう。

漢の武帝の文章の臣となる司馬相如は、素封家の娘である卓文君と郷里の成都に駆け落ちしたが、その所帯は、「家居徒^ただ四壁立つのみ」と、『史記』司馬相如伝に記す。まさに四方の壁だけで無一物の状態を的確に伝える。

○八月三十日

常用漢字

炊

呉音 スイ

漢音 スイ

訓 たく

「火」と「欠」とから成る「炊」の字は、火を吹きおこすさまから、火をおこして煮炊きすることをあらわす。「欠」は、人が口を開けているさまを描いた象形文字。

「炊飯」「炊爨^{さん}」は、飯を炊くこと、食事のしたくをすること。「炊金」は、黄金を炊いて食物とすること。珠玉を食物とする「饌^{せん}玉」の語と合わせて、贅沢な食事を褒めて「炊金饌玉」という。

「炊白」は、白で飯をかしくこと。白の中で炊事する夢をみた旅商人の張胆が、夢解きにすぐれた王生に卜^{ぼく}してもらうと、「君帰るも妻を見ざるなり。白の中に炊くとは、固^{もと}より釜無きなり」(「釜」は「婦」と音が通じる)と答えた。果たして家に帰りつくと、妻は死んで数ヶ月経っていた、と唐の段成式『酉陽雜俎』前集卷八「夢」が伝える。「炊白の夢」は、妻を失うことを意味する。

物価の高い都会での生活の苦しみを「桂玉の艱」という。戦国時代の遊説家蘇秦が楚の威王に謁見するのに三月待たされ、珠玉より高い食費と桂(香木)より高い光熱費に苦しんだことによる(『戦国策』楚策)。「炊桂」は高価な桂の木で飯を炊くこと。

○八月三十一日

常用漢字

洗

呉音 セン・サイ

漢音 セン・セイ

訓 あらう

「先」は「足」と「人」の会意文字で、人間の足さき、足さきが体より先に立つことをあらわす。この「先」と「水」とから成る「洗」の字は、足さき・足ゆびに水を通してあらう、すすぐ意。

「赤貧洗うが如し」は、貧乏で、すっかり洗い清めたように、およそ何も無いことをいう。わが国、原善（念斎）の『先哲叢談』物茂卿に、「時に赤貧洗うがごとく、舌耕殆ど衣食を給せず」と見える。「赤貧」は、「赤窮」とともに甚だしい貧乏をいう。

「洗心」は、心の煩いやけがれを洗い清めること。面目を革める。「革面」と合わせて、「洗心革面」の四字で、心をあらため面目を一新する、改心して善に向かうことをいう。

「洗耳」は、文字どおり、耳を洗う意。昔、帝堯ぎやうが天下を許由きよゆうに譲ろうとしたとき、許由は川の水で耳を洗ったという。俗世のけがれを避ける意を示す。また、耳の穴を洗い清めて傾聴する意にも用いる。

〔補記〕「漢字一日一字抄―漢字・漢語・漢文の窓〔七月の部〕―」（『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第四号、二〇一二年三月）をあわせてご覧いただければ幸いです。

【付記】二〇〇八・九年度研究部会「漢字・漢語・漢文に関する教育方法の検討」の報告の一部である。